

182. 課題討議・グループワーク

福島再生プロジェクト推進室長 高村 和典

先日、久しぶりに古巣の研修センターで研修のお手伝いをしてきました。

研修センターで実施している一部の専攻では、下水道の技術的な知識を伝えるだけでなく、研修生の方に下水道についての今後の課題を考えていただくために、テーマを指定して、グループ単位で課題討議を行う時間をとっています。

しかし過去の研修では、このような討議になれていない研修生が多いのか、参加している研修生の実務経験、経歴が様々なせいなのか、議論が活発に行われなかったことがあります。

このため、今回の研修ではグループでの討議を活発に行ってもらうように、討議の事前準備や環境を整える等の場づくりに配慮しました。具体的には、模造紙、付箋紙等を使用して討議を進めやすくしたり、グループの人数、構成等への配慮を行いました。グループの人数は、人数が増えれば意見が増え討議内容が充実しますが、あまり多くすると討議に参加しない人がどうしても出てくるため概ね4名で行いました。グループのメンバーの構成は、施設や組織体制等おかれている状況が似ている自治体同士の組み合わせとなるように、都市規模や処理場の有無等を考慮して決めました。また討議は、極力研修生同士の自主性に任せることが望ましく、講師は教えるのではなく、研修生のもっている課題や考え方を引き出すように心がけました。

また、過去の研修では討議の結果を全体でシェアするために、すべてのグループが全体で発表を行っていました。しかし、研修生の人数によりグループの数が多くなると発表に要する時間が長くなり、自分たちの発表が終わると発表を聞かずに討議に参加しない人が出てきてしまいます。また、全員の前だと、どうしても発表者以外が質問や意見を積極的に行うことが少なく、活発に討議されているとは言いがたい状況が見受けられました。そこで、今回は全体の発表は代表の2グループ程度にとどめて時間を短くし、その代わりに他のグループの検討内容を自由に見て歩く時間をとりました。ギャラリーの絵をみて評価をくわえながら歩くように、他のグループの検討内容をみて評価をしながら移り歩くことで、全体発表と同様に他グループの検討内容も把握でき、かつ数多くの研修生との交流が可能になったと思います。

この結果、課題討議は比較的活発に行われ、研修生の受講後のアンケート結果を見ると、概ね満足して帰っていただいたようです。何事においても、細かな配慮や工夫の積み重ねが重要なのだと改めて感じた次第です。